

琉球大学学術リポジトリ

芥川龍之介「羅生門」私考

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小澤, 保博, Ozawa, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1168

芥川龍之介「羅生門」私考

小澤保博*

A consider on R.Akutagawa's RASHOMON

Yasuhiro OZAWA

初期の芥川が森鷗外作品「諸国物語」「十人十話」から多くの影響を受けた事については佐藤春夫の指摘がある。小堀桂一郎は、「橋の下」(「諸国物語」)が「羅生門」創作の際にその素案になった事を指摘した。その主題は、正当防衛の論理である。

作品「橋の下」は、雪の降る夜に寒さと飢えで橋の下に追い込まれた一人の乞食と盗みの経験のある老人のつかの間の対決の話である。乞食は、老人を倒して悪の道に踏み込む事なく暫しの逡巡の後に二人は何事もなく別れる。この作品構想を素案として芥川は、「羅生門」創作上の決定的な主題を掴んだというのが、小堀桂一郎の「羅生門」論の趣旨である。「では、己が引剥をしようと思ひまいな。己もそうしなければ、餓死をする体なのだ」と言う現状改革の革命論理である。

作品「橋の下」では、雪に降り込められた夜の闇の中で、橋の下と言う狭い空間において二人の男のためらいの一瞬間は、何事もなく静かに闇の中に消えて行く。この静的な作品世界を悪の論理を是認する革命論理に飛躍させるためには、作者である芥川の方に、その精神史において何らかの精神革命がなくてはならない。

「羅生門」で文壇に登場する以前の芥川には、生まれ育った東京下町を舞台にした江戸情緒、退廃趣向の作品のいくつかの習作がある。「寒夜」(「芥川龍之介未定稿集」明治四十年頃)「老年」(「新思潮」大正三年五月)「野呂松人形」(大正五年七月十八日)これらの作品は、「ひよっこ」(「帝国文学」大正四年五月号)から最晩年の「本所両国」(「東京日日新聞」昭和二年五月)にまで書きつづけられる事になる。

芥川の江戸趣味や下町情緒を色濃く反映した退嬰的作品にも芥川自身の精神変革の反映があり、

「明治」(大正五年)から「難」(大正十二年)、あるいは「開化の殺人」(「中央公論」)「開化の夫」(「中外新聞」大正八年)「舞踏会」(「新潮」大正九年一月)には、退嬰的鬱悶気の中に現状打破の芥川の精神の反映がある。

若い芥川に精神変革をもたらしたものは、「恋愛問題」の挫折であり、放蕩生活からの疲労であり、最終的には横須賀の海軍機関学校教官に就任した事である。こうした芥川の精神のドラマは、情緒的世界に代わって過激な劇的創作を彼にもたらした。「羅生門」において展開された正当防衛の論理は、やがて松本清張「カルネアデスの舟板」に発展し、「開化の殺人」のテーマは同じく松本清張「恋情」の世界へと展開する事になる。

芥川に精神に挫折をもたらした「恋愛問題」は、彼に現状打破の精神革命を吹き込み、生来の怪奇趣味と相まって後世への影響の大きい作品を残す事になった。さらに「芥川龍之介未定稿集」には、「粉雪」「秋」別稿等、後の作品「秋」(「中央公論」大正九年四月)に結実する草稿断片を残している。これらの作品に反映しているのは、彼の苦い恋愛体験である。芥川作品の「秋」は、彼の二度の軽井沢滞在と相まって彼の弟子堀辰雄に文学的課題を残し、芥川の愛弟子堀は、作品「秋」の世界を生涯迫及する事になる。

養家に育った芥川にとって自分の意志で相手を選んで結婚する事は、一個の生活改革であると同時に精神革命でもあった。養家の反対によってこの恋愛に挫折した時、自分を育んだ生活空間からの離脱は、私生活においては放蕩生活になり、創作にあっては「今昔物語」を典拠にした一人の生活の場を失った男の極限状況の物語として具象化される事になったのである。「芥川龍之介書簡」(「井川恭宛」大正四年三月九日)は、今日に芥川の置かれた精神的危機の状況を、気を許した友人

*国語教育教室

に対するある種の甘えの中に切実に伝えている。この時の芥川の「自己の生存を失う事」だけが自分に許された唯一の道だ、と言うつぶやきはやがて十年後に彼自身によって実行される事になる。今まで育った養家の中で完全孤立を自覚し、家庭の中で自己の孤立を自覚した時に芥川の中で「羅生門」の世界は、今日の姿で形象化されるべく運命づけられていたと言える。

「ある日の暮れ方のことである。一人の下人が、羅生門の下で雨やみを待っていた。」

作品冒頭に登場したこの下人の問いは、人生いかに生きるべきか、と言った鷹揚な、高尚な贅沢な問いではない。生か死か、迫りくる餓死に対してどう対処するか、と言った自己の生存そのものを問う根源的な問いなのである。

「雨に降り込められた下人が、行き所がなくて、途方に暮れていた。」

下人は日常生活を営んでいた生活空間を失い、家族も職業もなく名前さえ与えずに天と地の間に一個の一粒として呆然として佇んでいるのである。

晩年の芥川は聖書に親しみ宗教に救いを求めようとしたが、彼の理性は最期まで宗教的救いとは無縁であった。芥川の知的関心は、仏教的因果応報の摂理の支配する「日本霊異記」には向かわず、善と悪とが同居する混沌の世界「今昔物語」にあった。晩年芥川自身この間の事情について語っている「今昔物語に就いて」（「日本文学講座」昭和二年四月）。

芥川は「今昔物語」の「(野生)の美しさ」に引き付けられると言って、説話物語の中の人物の本能のままの行動に共感を示している。

「彼らの心理は陰影に乏しい原色ばかり並べている。しかし今日の僕らの心理にもいかに彼らの心理の中に響き合う色を持っているであろう。」

行動だけの素描の人物に複雑な陰影を与え、人間の深層に眠る混沌とした本能を掘り下げ、現代人に通じる心理描写を加えたのは芥川の作家的手腕である。「主人からは、四、五日前に暇を出された」事によって下人は、初めて裸で衰微した現実の京の街に向き合う事になるのである。そうする事で生存の危機に直面し、形而下の意味において生きる意味を自らに問うのである。

「主人の家へ帰るべきはずである。ところがその主人からは、四、五日前に暇を出された。(中略)今この下人が、永年、使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない。」

今までの生活空間を失った下人は、羅生門の下で自己とは何か自問自答する事になるのである。下人が持っているものは、若い肉体とその肉体を守るための「腰に下げた聖柄の太刀」のみである。

「どうにもならないことを、どうにかするためには、手段を選んでいいとまはない。選んでいれば、築地の下か、道端の土の上で、飢え死にをするばかりである。」

下人のこの躊躇いに決断を与えたのは、「検皮色の着物を着た、背の低い、やせた、白髪頭の、猿のような老婆である。」堂々巡りをする下人の逡巡に決断を与えるために配置されるのは、下人と生活空間を同じくする一人の老婆である。こうした人物配置には、所詮人間が個としては、存在し得る事なく他者によって自己確認するしかない存在であると言う芥川の間人認識がある。事実「何度も同じ道を低回」する下人の逡巡に最後の決断を与えるのは老婆の発言である。今までの生活空間から放逐されて行き場を失い、生きる意味を失いかけた下人に生きる意義とその方法と与え、行動への勇気を与えたのは老婆の存在である。

羅生門の下で迫りくる飢えの予感に怯えて、生と死の実存的苦悩のために身動きならず、一個の肉体だけを武器に虚無的な思いに打ちひがれ、成す術のない一人の男に行為の勇気を与え、虚無の世界から行動の世界に導くのは、死期間近い一人の老婆の存在である。

「どうにもならないことを、どうにかするためには、この虚無思想を打破し、行為の実践によってのみ下人は救われるのである。「下人は、既に、雨ををかして、京都の町へ強盗を働きに急いでいた。」(「羅生門」初出)は、より明白に虚無の逡巡は行為の実践によって解決できるはずだと言う芥川の思想を我々に伝えている。

芥川龍之介の事実上の処女作たる「羅生門」は、生きるために悪を容認する正当防衛の論理によって貫かれている。善が悪によって駆逐される、あるいは善と悪とが同居する混沌としたカオスの世

界である。作品「羅生門」の世界を理解するためには、作品執筆時の芥川自身の言葉が参考になる。「善と悪とが相反的にならず相関的になっているような気がする」「善を愛せば悪も愛し得るような気がする」（「井川恭宛書簡」大正三年一月二十一日）このような書簡を受け取った井川恭は、芥川の最晩年にはその生活圏からは大きく隔たっていたものの最後の面会を果たす。数ヶ月後に彼は旧友芥川龍之介のために追悼文を書くことになるが、その一節に次のような箇所がある。「善と悪とは永久に争闘の運命を負わされている。悪の征服において善が成り立ち、善に対する反抗において悪が成り立つ、悪がなければ善もない、それが此の世の掟である。」（「友人芥川の追憶」昭和二年九月）今こして二人の両書簡を引き比べてみると十五年の年月を隔てて二人の認識が一致しているのに気づく、あるいは長い年月を埋めるべく古い友人が芥川書簡をなぞる形でその認識の溝を埋めたのか。

生きるためには善を駆逐し、悪行もやむなしという正当防衛の論理に立ったとき芥川の視野の前面に彼が生きていかねばならない娑婆苦に満ちた社会が立ちはだかることになる、あるいは悪を是認する認識に立ったとき芥川は社会そのものを不条理なものとしての認識することになった。

自分がこれから生きていかねばならない実人生についてこうした認識に立ったときに芥川の後年の運命は、定まったと言えるかもしれない。松本清張は、初期作品に後年の芥川の運命を何わせる何ものかを見るのは愛読者の錯覚であると発言したが（「昭和史発掘 芥川龍之介の死」）、運命は予兆をもって訪れる。人生を生む欲望のために悪を是認する立場に立ったときに芥川の文学の方向も決定され、必然的に彼の創作の方向も定まったといえる。

生きる目的のために如何なる手段も許され、悪もまたは是認されねばならない。こうした人生に対する認識が、彼の文学そのものを実人生からの逃避の手段とした。先に掲げた「井川恭宛書簡」と「友人芥川の追憶」の二つの文章は、十五年間の時間をはさんで図らずも芥川の全創作過程を暗示的に我々読者の前に示すことになるのである。善と悪との混沌とした社会にあって、生きる目的の

前に善が悪によって駆逐されるのも止むを得ないとの認識に立ったときに芥川の創作方法は、彼の考える実社会を作品の内部に再構築することであった。「今昔物語集」から題材を得た他の作品の人物は、いずれも芥川によって近代的知性を持った陰影に富んだ人物に再構成されている。「鼻」（「新思潮」創刊号、大正五年二月）「芋粥」（「新小説」大正五年九月）「娑婆と盛遠」（「中央公論」大正七年四月）「地獄変」（「大阪毎日新聞」大正七年五月）「藪の中」（「新潮」大正十一年一月）「六の宮の姫君」（「表現」大正十一年八月）これらの「王朝もの」といわれる代表的な作品の中の登場人物の多くは、いずれも近代人としての知性の深層内部に複雑な心理を隠している。

「この女のしたことが悪いとは思っていぬ。せねば、飢え死にをするのじゃて、仕方がなくしたことであろう。（中略）じゃて、その仕方がないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるであろう。」

老婆は、悪の論理によって自らの悪を正当化する、因果応報の論理、正当防衛の論理である。悪を是認することで悪に走る行為がいかに危険な結末を迎えるかは、すかさず返される下人の返答によって明白である。

「では、己が引剥をしようと恨むまいな。己もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」

こうした論理の展開の果てには、果てしない悪の行為の繰り返しがある。悪に対する許しもなく、悪に対する罰の存在しないアナキーな無秩序、混沌の世界では、罪の意識そのものが喪失する。作品「羅生門」は、内部に悪を限りなく助長させ得る危険な要因を抱えている。作品内部にこうした矛盾を抱えた作品を処女作に持ったことは、作者である芥川の人生に多分に影響を与えたと思う。悪の行為に対する罪の意識を消滅させる世界では、そもそも神の存在も意識されることはなくなるはずである。

「自分は半年ばかり前から悪くこだわった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になるべく愉快な小説が書きたかった。」（「あの頃の自分の事」中央公論、大正八年一月）と言うのは後年の芥川の述懐であるが、この頃処女作「羅生門」で自ら野放しにした悪の論理の展

開の危険について、あるいは正当防衛の論理が彼の人生に与えた深刻な影響について認識していたかどうか。

生きる意味を失いかけていた一人の男は、悪の是認の論理を手に生きることの意味を見出すことになるのである。「羅生門」は、行き場を失った一人の男の救済の物語でもある。

「ある日の暮れ方のことである。1人の下人が、羅生門の下で雨やみをまっていた。」作者によって下人は、無限の時間と空間の只中に孤立して突然放り出されて個として漠然とした不安の中で生の不安と戦うことになる。

「作者はさっき、『下人が雨やみを待っていた。』と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようという当てはない。」

下人は、作者によって生の意味も切迫したものとして自覚することなく、いわば決断を迫られることなく不安を抱いたまま作品世界に登場することになるのである。こうした生きる意味を見出せない1人の若者に決断を与えたのは老婆の存在である。

逡巡とためらいのために立ちすくんでいる下人は、悪の行為によって不安からそして生に対する虚無的な思いからも開放され、盗むという行為によって立ちすくみの状態からも開放されるのである。下人にとって強盗という行為の実践により救済は突然目の前にひらかれる。

「梯子の口までは、わずかに五歩を数えるばかりである。下人は、剥ぎ取った椀皮色の着物をわきに抱えて、瞬く間に急な梯子を夜の底へ駆け下りた。」

強盗という一線を越えた下人の前途には、茫漠たる可能性が前途に展開されることになる。

「足にしがみつこうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。」

蹴倒された老婆にはおそらくは死が、そして梯子を夜の底に向かって駆け下りていく下人には一つの可能性が開けることになる。蛇を干魚と偽って売り歩いた一人の女の小さな悪事は、死人の髪を抜くという老婆の悪を誘発し、悪の連鎖によって下人の強盗行為を正当化することになる。こうした悪の連鎖は、どこかで断ち切れない限り果てなく永遠に続くことになるであろう。正当防衛の

論理は、どこかに理不尽な要素を内包している。梯子を駆け下りる下人には、行為の実践により精神の救済と肉体の開放の両方が約束され、蹴倒されて羅生門に取り残された老婆には理不尽な死が待ち受けている。老婆は羅生門の闇の中に死を迎え、階段を駆け下りる若者には無限の未来と可能性が約束される。

作品「羅生門」は、果たして作者芥川の言うように「愉快な小説」であろうか。悪を容認する論理を打ち立てて「羅生門」を完成させて文学の世界に参加して行った芥川の文学生活は、出発当初から悲劇的な側面を内包していたとも言える。

「羅生門」は、処女作たる作品に相応しくあらゆる意味で芥川龍之介の素質を明白にしている。作品の素材、筋、主題に至るまで尽く先行の文学作品にその典拠を負っている。先に述べたようにあら筋は、森鷗外「諸国物語」(橋の下)から、さらに「黒洞々たる夜があるばかりである。」という最後の印象深い語句も森鷗外訳「刺絡」(黒洞々たる夜を隕星が穿つように、哄笑の声が室内に迸った。)を典拠にしている。以上の指摘は、すべて小堀桂一郎「芥川龍之介の出発」によるが、芥川の名誉のために「羅生門」が後世の作家に与えた功績についても指摘しておきたい。「下人は、剥ぎとった椀皮色の着物をわきにかかえて、またたくまに急な梯子を夜の底へ駆け下りた」作品の最後で芥川が、何気なく使った「夜の底」という平凡な語句が、後輩作家により深みのある象徴的な意味合いに変貌した例である。「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。夜の底が白くなった。」(「雪国」)冒頭の有名な一文であるが、川端康成によって「夜の底」という語句は、縹渺たる無限の可能性を秘めた空間的広がりを持った一文になり、雪国の夜を描写する名文になった。

「作者はさっき、『下人が雨やみを待っていた。』と書いた」。作者が作品の中に顔を出して小説中の物語的な雰囲気をかもし出す方法や、「その上、今日の空模様も少なからず、この平安朝の下人の Sentimentalism に影響した。」のように作品中にフランス語を使用する方法は、いずれも森鷗外が愛用した小説技法であり、森鷗外「諸国物語」からの小説技巧上の借用により初期の代表作を次々と創作していった芥川に鷗外は、賞賛の書簡

を贈った。

そこには真からの賞賛もあったかもしれないが、それ以上に自作を援用し詩的生命を吹き込み、海外作品を自家葉籠中のものとして作品を書き続け、森鷗外に近づかず夏日漱石に接近する芥川に対する多少の皮肉もあったかも知れない。

「広い門の下には、この男のほかには誰もいない。(中略) 羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男のほかにも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありそうなものである。それが、この男のほかには誰もいない。」

下人は、一人の男として羅生門の下に成すべき何物も持たぬ孤独な一人の若者として登場し、無為の寂寞たる時を過ごすことになる。「市女傘や揉烏帽子」は、それを打ち消すことで平安朝の京都の住民の雅な生活の片鱗を窺わせ、一人の男の孤独な寂寥感を作品冒頭に漂わせている。「み渡せば花ももみぢもなかりけり浦の苫屋の秋の夕ぐれ」(「新古今和歌集」藤原定家)の和歌の修辞技法に見られる文学的手法である。

「それから、何分かの後である。羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中断に、一人の男が、猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子をうかがっていた。」

無為の時をを過ごす「一人の下人」は、人生の目的を見出しつつある「一人の男」として作品中に再登場してくる。

竹盛天雄「介山・直哉・龍之介」によれば、葛巻義敏編「芥川龍之介未定稿集」所収の和歌「烏羽玉の夜空の下にひそひそとせぐまりつつ行く男あり」「夜のほども盗みもせなくひそひそと爪をかみつつわが行けるはや」等の和歌は、芥川の遊郭に遊んだときの体験を詠んだ一連の和歌で、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった」(「羅生門」初出)の最後の一行に直接結びつくという。さらに平岡敏夫「芥川龍之介一擘擘の美学」も「羅生門」の中の下人が、作者の横顔を反映しているという。

『「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、髪にしようと思うたのじゃ。』

下人は、老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。そうして失望すると同時に、また前の憎悪が、ひややかな侮蔑といっしょに、心の中にはいつて

来た。」

下人は、何故「老婆の答えが存外、平凡なのに失望した」のか、羅生門の上で死者の髪を抜くという老婆の行為に対して生活の糧を得るという目的以外の怪奇的な、不可解な何かを期待していたからだ、これは即作者芥川龍之介の個人的な趣向の反映であるという指摘である。

作品「羅生門」内部の時間と空間に視点を移すと、「ある日の暮れ方」「羅生門の下」に登場した下人は、「夕冷え」「夕闇」の時間の推移の中で「羅生門の楼の上で」「濁った、黄色い光」の中で一人の「栓皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆」と「この雨の夜に、この羅生門の上で」対面するのである。下人は、「羅生門の上で」老婆の「栓皮色の着物」を奪い、「急な梯子を夜の底へ駆け下り」て「黒洞々たる夜」の闇の中に消えていくのである。

空間的には、時間の推移とともに巨視的視点から微視的なそれに推移して物語が進行する。舞台となる羅生門も場面設定としての様子を変えていく。

「鴉がどこからか、たくさん集まってきた。(中略) ことに門の上の空が、夕焼けであかるくなる時には、それが胡麻をまいたようにはっきり見えた。」

「雨は羅生門をつつんで、遠くから、ざあという音を集めて来る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜めに突き出した葺の先に、重たくうす暗い雲を支えている。」登場人物たる下人も時間とともに羅生門の下の点としての存在から、羅生門の上の個としての存在になる。

「下人は七段ある石段のいちばん上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬に出来た、大きなきびを気にしながら、ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。」

「腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないように気をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子のいちばん下の段へふみかけた。」

「楼の内を覗いてみた。見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作にすててある」

点描としてのきりぎりすの存在によっても時間

の推移が感じられる。

「大きな円柱に、きりぎりすが一匹とまっている。」

「丹塗りの柱にとまっていたきりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。」

「羅生門」の作品中の時間的、空間的設定を問題にするのは、映画「羅生門」では、こうした視点が重要な意味を持ってくるからである。

小堀桂一郎「芥川龍之介の出発」によれば、芥川が「羅生門」創作の下書きにした森鷗外「諸国物語」（「橋の下」）では二人の登場人物のうち橋の下から離れていく男には未来が約束されているが、橋の下に残る者には緩やかな死があるのみである。「羅生門」以前の習作「芥川龍之介未定稿集」（「老狂人」「死相」）「新思潮」（「老年」「青年と死」）の四作の中で森鷗外「痴人と死」の模倣作である「青年と死」においても二人の登場人物のうち一人は死に一人は、元気に夜明けを迎える。狭い舞台に二人の登場人物が配置され一方の人物には、死があるいは停滞がありもう一方の人物には、未来が約束されている。こうした作品構図は、「羅生門」の作品世界そのものである。羅生門の上に取り残される老婆には死が、そうして「急な梯子を夜の底へ駆け下りた」下人には未来が約束されている。

芥川自身の告白によれば、羅生門の樓上に取り残されるのは彼自身の過去の精神生活であり「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでいた」（「羅生門」初出）のは、現状を肯定する自らの精神生活ということになる。

「自分は半年ばかり前から悪くこだはった恋愛問題の影響で、独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかった。」（「あの頃の自分の事」別稿）

「羅生門」の主題は、繰り返すまでもなく「カルデアヌスの船板」すなわち正当防衛の論理である。他に副次的な主題があるとすれば、それは他の芥川作品に見られるように登場人物の心理の不確定要因、人間心理の複雑さである。羅生門の上に「瘦せた、白髪頭の、猿のような老婆」の奇怪な行動を目撃したときに下人の心理は、恐怖と驚きとであった。作者の言葉を引用すれば、「六分

の恐怖と四部の好奇心とに動かされて」と言うことになる。老婆の不可解な行為に対して好奇心を抱いた下人は、老婆に対して何か人間の営みから離れた不可知なものを期待していたことになる。この期待は、老婆の行為が生存のための営みの一つであることを知ったときに好奇心から侮蔑に変貌する。

「しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということが、それだけですでに許すべからざる悪であった。」

老婆に対する最初の恐怖と好奇心は、老婆の行為を目撃するに及んで憎悪に豹変する。下人は、老婆が死者の髪を抜く行為を目撃することで道徳的正義派になるのである。この下人の心理の変貌振りには、幾分の無理があり、人知を超えた何物かを老婆の行為に期待して裏切られた下人の失望が隠されているかもしれない。するとこの若者は、神秘的なものに引かれた芥川の分身と考えられる。あるいは作者が、下人の行動を作中で叙述しているうちに作者自身の日常生活上の正義派が、下人の心理に論理的必然性もなく顔を出したのかも知れない。いずれにしても構想上の矛盾である。

「わしは、この女のしたことが悪いとは思っていない。せねば、飢え死にををするのじゃて、仕方がなくしたことである。されば、今また、わしのしていることも悪いこととは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、飢え死にををするじゃて、仕方がなくすることじゃわいの。じゃて。その仕方がないことを、よく知っていたこの女は、おおかたわしのすることも大目に見てくれるである」（中略）「では、おれが引剥をしようと思まいな。己もそうしなければ、飢え死にををする体なのだ」

悪によって悪の論理を屈服させる正当防衛の論理は、止まることなく回転していく危険性を内部に秘めている。「カルデアヌスの船板」の正当防衛の論理は、弱者切捨ての強者の生き残りのための不当な論理ではある。蛇を干魚として売りつけられた太刀帯の陣の者は、女にとって被害者であり、死後髪を抜かれる女は老婆には同じく被害者である。最後に下人によって着物を剥ぎ取られる老婆もまた被害者ということになる。悪の論理は展開してとどまることなく回転していく可能性を秘めている。この悪の論理の展開に歯止めをかけ

るのは、唯一神の摂理のみということになる。

三好行雄「『羅生門』の世界」では、「羅生門」の世界と引きくらべて大岡昇平「野火」が論じられている。餓死線上を漂う将校は、部下の兵士に自分を食うことで生き延びることを勧める。戦友の肉体を切り取ろうとする兵士の右手は、兵士自らの左手がそれを押しとどめる。将校の肉体を兵士が食うことで生き延びるとしたら聖餐の儀式が成立し、食人肉の罪を犯した兵士を罰するのは神のみということになる。「パンは私の体であり、杯は私の血による契約である」というイエスの最後の晩餐での発言は、神の恩寵としての聖餐式においてのみ通用するものでイエスならぬ将校の肉体を食することは、聖餐の儀式の成立にはならないが。

「わしは、この女のした事が悪いとは思ってゐぬ。せねば、餓死をするのぢやて、仕方がなくしたことである。されば、今また、わしのしていたことも悪いことは思わぬぞよ。これとてもやはりせねば、餓死するぢやて、仕方なくすることぢやわいの。」

死んでしまった女の悪事を弁護することで、自らの悪事を隠蔽し下男の追及をかわそうとする老婆の論理は、庶民の生活の知恵、正当防衛の論理、カルネアデスの船板の論理、生存のための言い逃れの弁明である。この庶民としての生活の知恵は、同じく庶民として生きる下男によって逆手に取られて潰えることになる。さらに一人の老婆の生存のための生活の知恵が、生きる術もなく平安時代の都市を彷徨する若者に救済を与えたことである。

職を失った下人は、羅生門の下で社会的にいかなる役割を担うこともなく呆然と立ちすくんでい

る。彼の心理状態は、餓死するか盗人になるかという二者選一の間を行き来している。女の髪のを抜く老婆を羅生門の上で取り押さえたのは、下人の素朴な正義感による。羅生門の上で老婆の釈明を聞いている間に下人は、弁明を逆手にとって自らの良心を封じる正当防衛の論理を駆使して行動に移るのである。

「下人の心には、ある勇気が生まれてきた。それは、さっき門の下で、この男に欠けていた勇氣である。そうして、また、さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇氣とは、全然、反対の方向に動こうとする勇氣である。」

老婆の言動で行為の勇氣を与えられた下人は、夜の闇の中を光に向かって走り始める。下人の行く手には、生の世界が約束されている。羅生門の下で心理的に立ちすくみの状態の一人の男に行為の勇氣を与えて救済への道を開いたのは、老婆の弁明のための論理である。羅生門の上に取り残された老婆に救済はなく、彼女はおそらく闇の中に消えていくであろう。「カルデアヌスの船板」の生存のための悪は許されなくてはならないという強者の論理を自己のものにした下人は、さらなる悪の行使のために京の町に、都市の内部に向かって走り始める。「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」（『帝国文学』初出）しかし、これでは悪の拡散であり羅生門の上のドラマを都市の内部で繰り返すことであり、それも良心の痛みとためらいを伴うことなく繰り返すことにつながる。「下人の行方は、誰も知らない。」（『羅生門』定稿）のほうが、露骨過ぎず余韻があってよいというのが吉田精一の説明である。（『日本近代文学大系』頭注）